

座談会

農業の周辺から農業と自分自身を語ろう

(前)

小数派でも生き生きやってる人と付き合おう

藤田和芳（大地を守る会会长）・小松光一（おびひろ農業塾塾長） 司会：昆 吉則（本誌編集長）

行革は役人や農協を問うことではなく、自らの飯の食い方を問うこと

問うこと

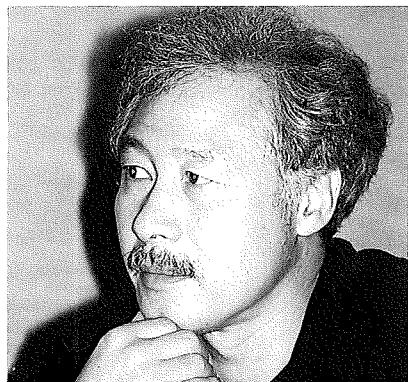
昆（本誌編集長） 実は今日、農業の「行革」の話をしたいのです。とかく行革論議では、とくに農業について行政と農協の問題だけが言わることが多いのですが、僕等自身のことには行政で語っていただこうと。活字では初めて語っていただこうと。活字になる座談会で自分のことを語れといふのはルール違反だといわれるかもしれないけれども、本誌のコンセプトは「問うべきは我より他になし」というものなんですよ（笑）。

行革を語るのに、もう官僚や農協などのいわゆる専門家を批判するという時代は終わっていると思う。自分自身を検証する、言葉ではなくメシの食い方において自分はどうなんだ、ということをそれぞれの個人が考えなきやいけない時代に来ている。つまり、自分が何で食い、社会の誰に必要とされているのか、と。また、そのことで個人の尊厳や自由という問題も出てくる。そこで初めて「自立した個人」としての日本人というものが生まれてくるのでは。

小松 農工間格差があつて、どんなにがんばっても農業は工業に勝てない、ということを前提にしているのが農業基本法のスタンスですよね。そのため農政があり、補助金制度がある。農業も工業も一緒に、同じように努力しようと

うとなると農政の存在理由がなくなる。それじゃ困るから、行政が学者、研究者、農協と一緒に農工間格差を大合唱している。農家もそういわれたほうが楽だからね。てめえの責任で何とかしない、じゃなくて、誰かが悪いんだ。

昆 農業は、行政にバックアップされてしか存在できないようにいわれる。農家は公務員であるかみたいに。その背後には農民被害者論みたいなものがあつて。その中では右も左も同じようなことをいつてきたわけですよね。



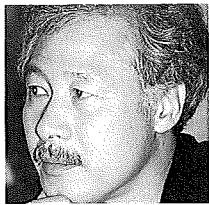
小松光一

昭和18年北海道生まれ。千葉県農業大学校教官を経て、御茶の水女子大学講師、おびひろ農業塾塾長。アジアと日本の農村交流と自立・連帯をテーマとして各地の青年農家たちと農村を中心とした地域づくり、国際化に取り組む。著書に「若きドン・ファーマへのメッセージ」「私の青年団改造論」「おもしろ農民への招待状」「ヒト、ムラ、マツリの地域論」など。

農民運動も市民運動も、何かを糾弾するよりも、いかに自己を確立するか、だと思う。行政府や国家に、本来自分たちがやろうと思えばできることを、委ねすぎている。都市でいえばゴミの問題などもそう。農民だって本来自分で必要なような補助金もらって、まだ足りないと泣き言いつて、何か問題

藤田 農工間格差はあると思う。農家が農民として生きてきたことに価値を見いだす人が、最初に有機農業に入ってきたと思う。最初に入ってきた人たちというのは、どんなに村八分にならうと、農工間格差がある（笑）。自分たちは、やりたいことをやるんだ、と。ちゃんとしたものを作れば、自分たちを支持してくれる人が出てくる、最初は一人でもいい、2、3人に増えてきて、結果的に作ったものが売れればいいわけですよ。

小松運動も市民運動も、何かを糾弾するよりも、いかに自己を確立するか、だと思う。行政府や国家に、本来自分たちがやろうと思えばできることを、委ねすぎている。都市でいえばゴミの問題などもそう。農民だって本来自分で必要なような補助金もらって、まだ足りないと泣き言いつて、何か問題



農協に供出してね、伝票で振りこまれて、前渡し金で金利をとられたくらいにして。そんな構図の中での、しかも権威と啓蒙と支配の構図ができていて、自分の使べき言葉まで用意された形できたわけですよ。農家は隔離されてきた。自分で借金までして作っているものなのに、作ることと売ることが自分の言葉や体験でつながっていない。考えてみると、日本の民主主義もそうですけれどもね。すべからく、人間の生活から言葉が切れていく。

小松 切れているね。

昆 だから真面目な農家は内向きの篤農家になつてしまふか、農協の運動員にされてしまう。実は有機農業やつているお百姓が社会性を持つてるのは、売る 苦労をしたからじゃないか。ところで、藤田さんはなぜ有機農産物に取り組んだのですか。

藤田 偶然ですよ。ぼくがたまたま知り合ったお医者さんが、たまたま有機農業を推進していくこうという方で、その人と話をしていくうち、やり始めていくうちに、だんだんと責任の領域が広がつて逃げ出すわけにはいかなくなつた(笑)。

ぼくの学生の時代には学園紛争などがあつたりして、ある意味では、社会や国

家に対して、異議申し立てをする運動をしていつたんですけど、そのことによつて多くの仲間たちを傷つけたし、自分も傷つきますよね、精神的にも肉体的も。そこから離れても、自分たちは何をしたかったのか、何だったのだろうという自問を繰り返しながら生きていくわけですよ。日常的には酒を飲んだりして楽しむ過ごしているだけですけれども、これでいいのかなんてね。そんなときにお医者さんと出会った。

農業の問題も、都市との格差の問題を含めて、農業単独の問題としては解決できない。農業の内部に全社会的な問題が内在している。そこに有吉佐和子さんの複合汚染などを読んだりしてですね。そろか、以前の俺は社会に対する異議申し立てをしたり、社会を変えようというときに、政治を変えて、政権を変えて、弱者を救う、農民を救う、みたいなことを漠然と考えていた。しかし、農業に全社会的な問題が内在しているのなら……。社会に矛盾があるとすれば、社会の根幹をなすのは第1次産業だから、そこに最も問題が凝縮されているに違いない。そこでこのところに自分の立脚点を置いて、そこからいろいろな発言をしたり、解決モデルを作つたりすることが有効ではないかと。食べるということにこだわらうと思つたのも、人間の生命行為の根幹は食べることですから、社会に問題があるとすれば、食べるという行為にもそれは凝縮されているだろうと。食べるということこと農業を結びつけると、ここに俺の仕事があるなど(笑)思つたわけですよ。

昆 もう何かを糾弾してもしようがな



い、自分で物の流れを作つていこうと。

たてまえを繕うことは、もう
ここらでいいかげんに止めに
しよう

それで担当者が首をひねつて、フォーラムでもやるしかないと。

講演みたいなものをやつて、パネラーカーをそろえたら、おしまいなんです。人は集められますよ、動員かけて。しかしそれは、お金があつたんでたまたまやるだけの話でね。たてまえとしての農業保護、たてまえとしての組織、補助金、全部たてまえでもつて、本当のところが一個もないから、フォーラムもたてまえでしかなくて、終わつたらおしまい。これは小さなイベントの問題だけれども、すべか

ら食と農のフォーラムをやりたいという話があつて、予算が100と40~50万円あるという。その県の農業を活性化するためには、食の問題から接近していくというわけだから、海の問題も畑の問題も含めてやりましょうといつたら、いや、「米」なんですと。その県はあまり米に依存しているような県ではないんですね。

藤田 コメが一番議論しやすい?

小松 いや、違うんです。補助金ですら日本農業の構造 자체が、全部たてまえを繕うことになつていて、いろんなことが起きているんだけれども、実は何も論議していない。

昆 農水省や経済連が広告代理店を使つていろいろやつてているでしょう。消費拡大運動キャンペーんだとか、どこどこ産の米とか、新ブランドとか。膨大な税金の無駄使いをして広告代理店だけ儲

かっているみたいだね。

小松 消費だけの構図なんだね。

世界一律の幸せなんてない。
それぞれの幸せのひな形を作
ろう

昆 そう。藤田さんの大地を守る会は、
もともと何もないところで始まって、現
在の規模は……。

藤田 扱い高で、年間200億円ぐら
いですね。

昆 一方では大地のような展開もでき
ていて、また小松先生が先程話されたよ
うなりアリズムで逞しく生きている農家
も結構いるというのに、それなのにいま
だに、なんですね。米は支配の構図にの
りやすいんでしょうね。しかし本当の農
業の活性化は……。

小松 やりたいやつがやる。

昆 逆にいえば、あいかわらず役人の
居場所作りのために、金と制度があり続
けているわけです。農家はやりたくない
ても、役人や農協が押し付けるみたいな
ことがあるわけです。だからこそ藤田さ
んの仕事もそただけど、民間のまともな

商売人と農民のいき合いの中で農業を交

えていく、商行為をきっかけにして新し
いものが起きていくというのが、むしろ
健全な姿だな、と思う。そして、藤田さ
んがおやりになっている運動が、作り方に
こだわりながらも、実は食う運動である
と同時に、生活の運動でもある、あるいは
はウンコをまた農業に戻す運動でもあ
る。そういう意味合いもあるなあと思っ
ているんです。

藤田 神の領域までいくと、みんな平
等になるのかもしれないけど、何千年前
からか、人類にといって国家ができたこ
ろからいわれてきましたけど、我々が幸
せになりたい、自立したい、というのは、
みんな同じ幸せではないし、自立の形が
違うと思うわけですよ。幸せとは冷蔵庫
と車と何がなければならないというよう
な、世界一律な幸せなどありえないで
き笑)、自分の手のとどく範囲内で、物質
的なものだけではなくて、家族の愛とか
共同体的信頼など、そういうものが育ま
れた結果としての幸せだと思うんですね。
自立ということと同じように考えな
ければならないな、と。それで社会を変
えていこうとなると、自分で「雛形」を
作るしかないんですよ。こういう風にし

たら自立できた、こうしたら幸せになれ
たという雛形を作つて、それは隣の人と

自立の形が違う幸せの形がある、しかし
周りから見て、あいつは生き生きしてい
るなあとか、食えてるじゃないかけつこ
う、というのが、それが影響していく。

個人であれ組織であれ、北海道ではジャ
ガイモでうまくいったら、九州の生産者
が俺たちは野菜でやつてみようとか、そ
れが連鎖的に起こつていったときに、社
会現象になる。結局はその雛形を作る運
動だと思うんですよ。

小松 農民なり個人があつて、制度が
あつて、空気のような制度があつて、制
度を変えていかないとダメだという考え
は、「個人」あるいは「農民」に対する
制度でモノを考えていく。しかし制度と
いうのは幻想物、人工物でしかなくて、
どこからどこまでが個人で、どこからど
こまでが制度なのか、実体はわからない
わけですよ。

昆 実体のない「言葉」ですね。市民
だの社会だの民主主義だの、共同体だの、
自分らの言葉でないもので語り続けてい
るんじゃないかなと。それで社会を変
えていこうとなると、自分で「雛形」を
作るしかないんですよ。こういう風にし

する人に着目するんじやなくて、元気の
いい人に着目したほうが、たぶんおもし
ろいと思うんですよ。生き生きとやつて
いる人が、仮に少数派でもね……。

藤田 いるんですよ。昆さんもおつし
やいましたけど、労働の概念というのは、
自己を確立していく、たとえばコップ
ひとつ作るにしても、自分の知識や経験
とか、いろいろなものをコップに投入し
て、ひとつ一つの形を作るわけですよ。

昆 間違いないなくいらっしゃいますね。
藤田 いるんですよ。昆さんもおつし
やいましたけど、労働の概念というのは、
自己を確立していく、たとえばコップ
ひとつ作るにしても、自分の知識や経験
とか、いろいろなものをコップに投入し
て、ひとつ一つの形を作るわけですよ。

お金だけでない、他人の「感
謝」が返つてきて人は自立し
ていく

する人には着目するんじやなくて、元気の
いい人に着目したほうが、たぶんおもし
ろいと思うんですよ。生き生きとやつて
いる人が、仮に少数派でもね……。

(続)

座談会

農業の周辺から農業と自分自身を語ろう

(前)

藤田 そこで我々が着目するとした
ら、モデルになるような人に着目すれば
いいわけですよ。全体像ってのはどうで
もよい。我々はむしろ、情けなく行政を
批判したり、自分たちの境遇を嘆いたり

